

# 一期一会を大切に私の街角国際交流

同志社香里中学校3年 中山 めぐ

街角での国際交流は、誰にでも突然やってきます。

朝からせみがミンミンと大きな声で鳴く、ある暑い夏の日のことでした。

私はおばあちゃんとショッピングの約束があり、待ち合わせ場所の難波に向かっていました。電車が最終駅の難波に着く直前に私の携帯が鳴り、目をやるとおばあちゃんからのメールでした。

「早く来て！今どこ？」と短いメールが届いていました。私は「まだ電車の中！」と返信しながら、急いで待ち合わせの場所に走りました。何かあったんだろうか・・・ヒヤヒヤしながら走りました。待ち合わせの場所で、おばあちゃんは私の心配をよそにニコニコしながら、いつものように手を振っていました。「もう少し早く来てくれたら良かったのに・・・」実は少し前に韓国人らしい若い三人組の青年が、地下鉄の改札口を教えてほしいと、片言の日本語と英語で聞いてきたそうです。最近、日本を訪れるアジアの人々が増え、特に韓国や中国の人々がここ大阪にもたくさん観光で来ています。その若者達は手にハングル文字の地図を持っていたので、おばあちゃんは彼らが韓国人と分かったそうです。おばあちゃんはもちろん韓国語を話せませんし理解もできませんので、その時知っている限りの英語と手ぶりで彼に一生懸命説明したそうです。しかし、彼らが理解しきれていない様子だったので、結局「カモン」と言って、地下鉄の改札口まで連れて行ってあげたそうです。彼らはおばあちゃんのその親切な行動に、英語ではなく片言の日本語で「ありがとう」と言って手を振って去っていったそうです。おばあちゃんは胸がドキドキしながらも「ありがとう」の言葉を聞いた時何かうれしくて楽しい気分になったようです。ただ、同時に韓国語で何かひとつでも声かけしてあげられなかったことが、少し残念に思ったそうです。おばあちゃんは、私がもう少し早く待ち合わせの場所に来ていれば、おばあちゃんより私が彼らにうまく説明できたのにと残念がっているというので、私は「そうね！」とこたえ

ながらも心の中では早く来なくて良かった・・・とつぶやいていました。私は今 K-POP が好きで暇があれば K-POP を聞いています。おばあちゃんはそんな私だから、韓国語が理解できると思っていたようです。でも、いくら K-POP が好きでも、韓国語が上手に話せるわけではありません。私はおばあちゃんにそのことを説明しても仕方ないと思い、私は笑ってただおばあちゃんの話聞いていました。

最近、街には英語はもちろんのことハングルがおどろくほど、ほとんどの看板に書かれ出しています。今回のように街角で突然韓国人に道をたずねられたりすることもあります。英語ならともかく韓国語で話しかけられたらやっぱりドキッとします。韓国語と違い英語は中学で習い始め、私たちの社会でも英単語はたくさんあふれています。ご存知の通り、英語は世界の公用語として使われています。ですから、いろいろな国々の人々が結構話し理解します。私も以前は英語さえ使いこなせば、国際交流には問題ないと信じて英語以外の他言語にはあまり興味を持っていませんでした。でも、おばあちゃんが経験した今回の出来事を聞いた時、私の中で何かが変わり始めた気がしました。しかしそれが何なのか？はっきりした答えが見つからずにいました。

ところが、この夏家族でタイのプーケットに行った時私はその答えを見つけました。

タイのプーケットではホテルの中でもビーチでも英語が使えたので、コミュニケーションをとるのは困りませんでした。母は旅先で出会うタイの人々と接するたびに、タイ語を教えてもらい使い始めたのです。もちろん難しい言葉ではなく「おはようございます」「サワディカッ」「ありがとう」「コップンカッ」「気にしないで」「マイペンライン」などの本当に簡単な言葉ばかりですが、母はプーケットにいる間それらのタイ語を笑顔でずっと使い続けていました。母のタイ語の発音が通じているのかどうかは別として、母がタイの人々にタイ語で話しかけると、タイの人々の表情はパッと明るくなったのを見て私は気づいたのです。おばあちゃんとのショッピングの時に見えなかった答えが見えだしたのです。

人が人と仲良く交流する原点は、相手を思いやることから始まります。相手を理解する思いやりを相手に示すことから始まります。

相手の母国語を使ったことで、知らないうちに母は相手の心の扉を開き、相手に自分を

受け入れてもらい、相手をまた受け入れていたのです。

今まで知らなかった人、国も違う、生活も違う、習慣も違う人との間にある見えない壁は、こういった思いやりの行動で一瞬にして消え、その後に新しいきずなが生まれてくるのではないのでしょうか。難波でおばあちゃんが道案内をした後なんだからうれしい気分になれたのは、もちろん人の役に立ったという満足感もあったのですが、何より別れ際に日本語で「ありがとう」と言ってもらえたことが、日本人であるおばあちゃんにとってなにか温かいものが込みあげてきたのだと思います。

私は世界中のいろいろな国を家族とともに旅しています。それらの国々はいつも英語を母国語とする国々でした。ですから、今回のようなタイでの経験は私にはありませんでした。今回の旅で今までとは違った貴重な体験をしました。

私はこの体験を学びとして、自分の国の中だけではなくどの国に行ってもどの街に行ってもその国の言葉を知り、学び、使っていきたいと思います。そして、思いやりの心「一期一会」を大切に私なりの街角国際交流をしていきます。将来国際人として英語だけでなく出来る限りたくさん違った言語を学び使っていきます。

「一期一会」を大切に作る小さな街角国際交流がいつか大きな交流になり、世界を丸く温かいものにしてくれると信じています。